

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第455号 2020年2月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

## 心の花

織田 智永

花が好きで、よく家に生けるようにしている。好きな花は色々あるが、芍薬を見かけるとつい手が伸びてしまう。芍薬は初夏の季節の我が家の玄関の定番だ。花開いた姿ももちろん好きであるが、特に好きなのは、蕾である。真ん丸で、大きな大きな蕾。何か希望がいつぱい詰まっているように感じさせる。どんな花を咲かせるのかこちらの胸にも期待を膨らませる。芍薬の蕾は、子どもに似ているのではないか。

以前六年生を担任した子どもに、卒業した後しばらくして、会うことがあった。その子は中学校に入っても自主勉強をずっと続けていた。「偉いね。」と声をかけた所、「継続は力なり。」と書いているページを見せ、「先生からもらった言葉です。」と教えてくれた。私は、自分がその子にそんな言葉をかけたことをすっかり忘れてしまっていた。自分が少し恥ずかしく感じたが、言葉の力に驚いた。何気なくかけた言葉がその子の行動に影響したのだと。

すぐには花は開かないが、蕾のような子ども達は、その心に沢山たくさん言葉をもらい、膨らませている。そしていつしか自分で花を咲かせる時が来る。私達の仕事は、たくさんさんの言葉を子ども達に与えることができる。花には、水をあげ光をあげるように、子どもには、たくさんさんの励まし言葉、温かい言葉を与えられるようになりたいと思っている。

子ども達に、たくさんさんの言葉を与えられるようになるためには、自分の心のアンテナを張り続けていたいとも思っている。最近出会った言葉を紹介したい。写真家、星野道夫さんが遺された言葉だ。光村図書の子どもの教材に「森へ」という教材があるが、その筆者が星野道夫さんだ。アラスカに拠点を置き、アラスカの自然のすばらしい写真を撮り続けた星野さんは、取材中にクマに襲われ、一九九六年、四十四歳の若さで他界された。数年前、没後二十周年の展覧会が各地で開かれていたようで、たまたまその展覧会に行った私の妹が感動して、写真集を購入していた。その写真集に載せられていた直筆の言葉だ。

「短い一生の間に 心魅かれることに出会うことはそんなにおおくない 見つけた時は 大切に 大切に・・・」

星野さんの生き方に重なって、心に染みた言葉だ。今年度は六年生の担任なので、この私の心に響いた言葉を子ども達と共有できた。

子どもは蕾に似ていると前述したが、大人の心にも、希望に似た大きな蕾はあるのではないかと考える。

この仕事ができる残された時間で、子ども達の心にも、自分の心にも大きな蕾を膨らませ、きれいな花を咲かせられるような毎日を積み重ねていきたい。

(大阪府守口市立八雲東小学校)



▼学習指導要領は「思考力・判断力・表現力」の指導事項を学習過程に沿って構成している。「書くこと」においては、内容を「題材の設定・情報の収集・内容の検討」「構成の検討」「考えの形成・記述」「推敲」「共有」という構成である▼「理由が分かるように書くこと」(3年東書)は、身の回りにおける記号や絵文字を題材にした、絵文字の説明をする文章を書くことを目的にしている。学習過程では「考えの形成・記述」である。記述の仕方を工夫することが主な学習活動になる。教材は、身の回りにおける絵文字や自分で考えた絵文字を示し、学習意欲を高めさせるように編集している。子供達の興味は絵文字に向き、続いて、文章に向くだろうということは今までの経験から理解できる▼「主体的・対話的」ということから、子供達の関心が「自分で考えた絵文字」に向いていくと、話し合いや絵文字の説明は活発な学習活動が予想できる。しかし、「自分の考えとそれを支える理由」を書くことにつなげるにはかなりの工夫が必要である。▼教科書では、エレベーターを表す絵文字を説明する文例がある。導入段階で絵文字の興味から授業をすすめるより、いきなり、文例を学習し、「分かりやすい文章」の秘密探しの方が主体的・対話的な学習につながるように思える。

(吉永幸司)

授業の名言から考える 森 邦博 3

話し合いの「準備時間」今の時代に、国語の先生で話し合いをやらせない先生なんていません。なんでも話し合っ「らん」ということになってい

「大村はま先生の著書『教えること』の復権」からの抜粋である。一方的教授を改善し、子どもを学習の主体とすることは授業実践の課題であろう。

子どもたちが話し合っている授業風景を思い浮かべるのは自然で当たり前だと思っていた。それに対し批判的な響きを感じる文章である。若干の違和感を持ちながら、その先を読んでいった。

「ある問題が出てきて、即席で心を通じ合うような話し合いができるなんて、そんな日本人はいないですよ」

「だからしっかりと準備するんで」

「文に出会い、はっとした。確かに『準備』が不十分なままです。『では、このことについて5分で話し合いますよ』と指示して机間指導をする場面はよく見受けられないか・・・?」

「いけないのは、話し合いを教えないということ」

「(II指導していない)のではないかと問われているのだとも思っ

「子どもだけに任せて子どもに司会させて、教師は見物して、もっとしっかり発言せよなんていうのは、教えていることにならない」

「では、話し合いで考えを深め、広げようとするにはどうすればよいのだろうか」との思いを持って読み進める。

「話し合いの前にはまず教材を用意する。その教材をもとにして準備時間というものを持ち」

「話し合うことではない、言いたいことは、とやう人が話し合いの席にいたらはじめから話にならない。言いたくしてやうがないことが胸の中にあるようにしないと。」

「それが準備時間ですな」

「準備時間」にするべきことが見えてきた。教材との出会いによって子どもの中に、「聞いてほしい。みんなの考えを聞きたい」や、「迷っているの、意見や感想も聞かせてほしい」を作り、話したくな

「また、実践を振り返り子どもの姿に学びながら修正し、より確かな授業を構築していくことを大切にしていきたい。」

(京都女子大学 非常勤講師)

「授業を語る会」振り返り 弓削 裕之

2月8日(土)、本校で行われた「授業を語る会」では、『スーホの白い馬』(光村二下)の授業を公開した。本時の流れは、①めあての設定。②本文(学習場面)の一斉音読。③ペアで白馬の気持ち想像できる言葉を見つける。④見つけた言葉を発表する。⑤板書をノートに写し、学習の振り返りを書く。めあての「にげ出した白馬の気持ちをもとに『にげ出した前時までの学習の流れを踏まえた子ども』の発言より設定した。

子どもたちが見つけた言葉

風のように・ふりはなす・はね上がりました・走りつづきました・それでも  
とてもおいけません・おそろしいきおいで・ころげおちました

これらの言葉から、子どもたちは「早くスーホのところに帰りたい」「スーホがすき」「スーホは大切にそだててくれた」「大すきなスーホをのせて走りたい」などの気持ち想像した。「走りつづけました」の言葉では、「それでも、白馬は走りました」と「それでも、白馬は走りつづけました」の違いに注目させ、スーホを思う白馬の強い気持ちに迫ることができた。

これまでは、見つけた言葉を「言ったこと」「したこと」に分けて印をしていたが、前時に「本

にその二つだけなのか」と子どもたちから疑問があがった。そこで、「したこと」とは何が違うかと思

「言葉はありますか」と尋ねると、子どもたちは「風のように」「おそろしいきおいで」の二つを捉え、「ようす」と名付けた。

授業後の協議会では、学習規律を守り、言葉にこだわって考えていた子どもたちの姿を話題にしていただいた。「学びに向かう力をどう評価するか」「めあてに沿ったまとめのあり方をどうするか」「一つの言葉に対し、複数の子どもが想像した気持ちを発言する場面があればよかった」など、課題もたくさんいただいた。

学習の振り返り

●白馬は矢がささっていたけれどどうしてもさいこにスーホに会いたかったのだと思います。

●白馬はスーホのところにいくのにとてもひつしだつたんだなと思いました。

●白馬はスーホが大すきだからむちゅうで、はやく走りつづけたんだと思います。

●白馬の頭の中は大すきなスーホの気もちだと思えます。

授業中の発言では出てこなかった「どうしても」「ひっし」「むちゅう」などの言葉が綴られている。子どもたちは、想像した白馬の気持ちにふさわしい言葉を自分なりに選んでいる。まだまだ表には出ていない言葉があると思うと、実践の手を休めることはできない。

(京都女子大附属小学校)

「ウナギリーウェイ」で  
 きまうみをもっとところを  
 中心にしようかいしよう  
 『ウナギのなぞを追って』  
 谷口 映介

本教材は、ウナギの稚魚（レプトセファルス）の旅の過程や、事実をもとに考え、仮説を立てて検証していく筆者たちの謎解きの面白さ、長い年月をかけて調査・検証を繰り返す研究者の情熱などが時系列に書かれている。学習者の多様な興味に答えうる文章と言葉、読み手それぞれが興味をもったところを中心に、内容をまとめて紹介する言語活動に適した教材である。特に本教材が初出である「要約」を大切にしたい。

「要約」とは、目的や必要に応じて元の文章を短くまとめることである。従って、興味関心によって要約文もそれぞれ異なる。大切なのは、自分にとって必要なキーワードを文章から取り出すことである。子ども達にとっては初めての経験であるため、要約のポイントとして次の三つを提示した。

○「省く」…直接関係のない文や言葉を除く。  
 ○「付け足す」…うなぎ言葉や詳しくする言葉  
 ○「つなぐ」…複数の文や言葉を一つにする

勿論、ただ単に、提示するだけでは、自分で使えるようにはならない。そこで、既習教材『ありの行列』を使って例文を示した。約千字の全文を四百字に要約した

ものであるが、子ども達は、例文から工夫を見つけた。例文

【例文※①③は付箋での整理】  
 ①ありの行列は、石のところでみだれて、ちりぢりになった。  
 ②ようやく、一匹のありが、石の向こうがわに道のつづきをみつけた。  
 ③また、だんだんにありの行列ができていった。

④次は、この道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎりました。すると、行列はみだれまじり、一匹のありが道のつづきを見つけると、また、行列ができました。

子ども達からは、「三つの付箋の言葉が一文につなげられている。」「『ちりぢりに』や『ようやく』などの言葉が省かれている。」「『く』や『見つけると』などのつなげる言葉が付け足されている。」「などを提示することができた。例文を提示したことで、要約する方法を理解することにつながった。

「ウナギのなぞを追って」では、同じ興味をもつグループで「これは絶対に外せない」語句や文を出し合い、試しに冒頭部分を要約する時間を設定した。レプトセファルスの成長グループは、次の様な冒頭の一文を作った。

「ウナギは、日本から二千キロメートルはなれたマリアナの海で、新月のころに、六ミリメートルのたまごを産みます。」

要約に必要なキーワードを選び、文を練る姿がどのグループにも見られた時間になった。  
 (滋賀大学教育学部附属小学校)

第7回 近江の国語  
 実践研究会  
 「深い学びを  
 実感できる学習づくり」  
 蜂屋 正雄

1月25日に草津まちづくりセンターにおいて、第7回の研究会を行った。「じどう車くらべ」(1年・光村)と「鳥獣戯画」(6年・光村)を梅野泰子先生(高島市立本庄小学校)と北川千恵先生(草津市立矢倉小学校)の二本の提案発表を中心に学ばせていただいた。

森邦博先生の講話  
 「深い学び」というと、指導要領の改訂に伴い教科書も変わって、4月からは成果が求められてくる。何か新しいことを1からやり直さないといけないというイメージがあるが、先行実践の中にも学習者自身が学びの深まりを実感できる取り組みがある。実践例を紹介しながらお話しいただいた。

「じどう車くらべ」  
 教科書にでてくる語彙を子ども達の言葉で言い換えさせる中で、想像し読み深めていく実践でした。本時の記録もビデオ記録と文字起こしがされていて、教師の発問と子どもとのやりとりがよくわかった。本時では教材文がクレイション車を説明している文章を読みながら子どもたちがクレイション車を想像している様子もよくわかる実践。

「鳥獣戯画」  
 自分の思いを書き残すことを目標に「書くために読む」というスタンズでの実践。筆者である高畑勲の書きぶりの魅力を探り、その表現技法を自分の魅力にする。作品の魅力を探る中で、「実況中継みたい」という子どもの発言から

語りかける表現や体言止めの勢いやスピード感というものに気づいていった。最後は、二枚目の挿し絵を元に解説文を書く活動を通して、書き出しや体言止めを使って場面にあった表現を目指す実践。

吉永先生のお話と二本の実践提案を受けて、講話をいただいた。はじめは国語科と道徳科の違いについて。道徳は教材を話題として自分の心を根拠に学習を深めていく教科。国語科は教材を根拠に学習を深めていく教材であるというように、何を言われたのがまず印象的であった。

次に、新しい指導要領の思考判断表現で言うところの「精査」と想像し合うことが学習活動になる。「じどう車くらべ」で言えば、クレイション車についての文章から、知らない言葉も子どもたちの言葉に直させることで、より実態に近いものを想像していく過程が見られ、語彙力という点でも子どもの実態にあった学習であったことを述べられた。「鳥獣戯画」では、他の説明文とは書き出しが違っている。「比べる」ということをさせている。筆者の文章が上手であるという共通理解から、本文を根拠にその上手さを探ると、考えさせるのが大切である。また、教材文はまず読ませること、読めるようにすることが大切。最後に印象深かったのは、「読めるようになって初めて想像力も働かせられる」という言葉。

お二人の提案を元に、たくさん会ったことを学ばせていただいた研究

(草津市立矢倉小学校)

共に学び合う、聴き合う  
集団づくりをめざして  
池崎 繁伸

本校は、平成二十二年度から「学びの共同体」の理論をよりどころとして、主体的・協同的な学びを授業に取り入れて研究を重ねてきた。「共に学び合う聴き合う集団」をつくるための重点は次の3点である。

- 課題をどう設定し、どのように教材に向かわせるのか。
- 授業の中で「聴く」「つなぐ」「もどす」をいかに実践できるか。
- 授業の中でどれだけ多くのグループ学習を取り入れることができるか。

この3点を大切にして、教師は教室の中に学び合う関係を作り出すことを目的に授業研究を進めていく。学び合う雰囲気醸成されてくれば、グループでの関わり方がわかってくる。グループでの関わり方に学び合う雰囲気生まれれば、個人での作業や学習への取り組み方も変わってくる。

子ども達に必要なのは、授業の中で学び合い聴き合う関係の心地よさ、高まり合える楽しさである。

このような授業をめざして、教師全員が研究授業を行う。管理職も例外ではなく、私も教頭として、卒業を前にした六年生の各クラスで1時間ずつ国語科の授業をさせていた。その概要は次のとおりである。

単元名『卒業の自分の考えを広げよう』  
〔ねらい〕

卒業をテーマにした短歌や詩を読んでまとめた意見や感想を共有し、卒業についての自分の考えを広げることができる。

〔展開〕

- ①めあてを確認する。「短歌や詩を読んで、卒業への自分の考えを広げよう。」
- \*一般的な「卒業」という言葉からイメージしていくのではなく、「自分たちの卒業」への考えを広げる学習であることを意識させる。

- ②卒業をテーマにした短歌の作品例(6年生児童作)をもとに、意見や感想を共有する。
- 学校に来る日数があまりないだから
- 今日もまた近づいてくる卒業は

\*同じ小学六年生が詠んだ短歌の一部を伏せて、自分の今の思いとぴったりな言葉を考え、共有する。

- ③卒業をテーマにした詩の作品例(6年生児童作)をもとに、意見や感想を共有する。
- 朝

またいつもの朝がきた家を出て行き親に「いつてきます」と言うときふと思う。  
このランドセルをせおってこの時間にこの言葉を言うのはあたたかたわずかということ。

最後の日は  
どれだけ強くなっているのだろう。  
今思うのは

ということだ。  
\*同じ小学六年生がつくった詩の一部を伏せて、自分の今の思いとぴったりな文を考え、共有する。

- \*詩の一部を考えることをおし、卒業についての自分の考えを広げることが重要であることを意識させる。
- ④学習の振り返りをする。
- \*卒業についての自分の考えを広げることができたかについて、振り返り文章でまとめる。

今回の授業を行うにあたって、主となる言語活動を「卒業式当日の自分へ手紙を書く」とする案も考えたが、最終的に書くことよりも聴き合う活動を重視することとした。

本時の振り返りでは、「みんなが考えた詩や短歌を聞いて、一人一人の思いが知れて、お互いわかり合えた気がする」「一日一日を大切に過ごして、もつとつながり、思い出を増やしたい」等の感想があった。

グループ交流で一瞬静まりかえり、子どもがつぶやき始め、友達に語り始めるまでの時間を辛抱強く待つことの大切さを改めて実感した授業であった。

(彦根市立河瀬小学校)

編集後記

▼一月例会(四五回)は、第七回(江の国語実践研究会)(草津市まちづくりセンター)に参加しました。研究主題「『深い学び』を実感できる学習づくり」。

講話①森邦博先生(京都女子大学講師)  
②実践提案を梅野泰子先生(本庄小)「じどう車くらべ」(一年光村)北川千絵先生(矢倉小)「鳥獣戯画」(六年光村) ③講話吉永の日程で開催されました。

▼森邦博先生は、現在、大学と小学校の学校現場で講師として活躍をされています。授業を通して「深い学び」は、子どもの学びを見守るといふ視点で事例を交えてわかりやすくお話されました。▼梅野泰子先生は、じどう車くらべをする目的で学習をする一年生の子どもの意味を提案しました。知識・技能、つまり「できる」を目指す新しい提案でした。北川千絵先生は、二つの説明文の書き出しを比べることから問題意識をもたせ、課題を生み出す展開を提案をいたしました。教材の深い内容を自分の力で読み解くという学習活動の仕組みがよく分かる提案でした。▼研究会のまとめとして、「これからの国語科授業について」話しました。国語を学ぶということについては、一つは、「語彙力」を育てる方法について。二つ目は「想像力」につなげる学習方法を吉永が提案しました。

▼巻頭には、織田智永先生から、玉稿をいただきました。深謝。(吉永幸司)